

洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内
洛友会
〒606-8202
京都市左京区田中大塚町49
075-701-3210

洛友会中部支部の活性化と一層の発展を願って

中部支部長 増田 宗敏 (昭38年卒)



(1) はじめに

昨年(平成15年)6月26日の中部支部総会において、支部長に選任された増田でございます。前支部長の 大野彰氏(昭25年卒)から「次はやって下さい」と事前に言われ躊躇しましたが、名鉄に入社して以来、大野氏をはじめ、石川進氏(昭26年卒)、遠藤茂氏(昭27年卒)の諸先輩には洛友会中部支部主催の諸行事(総会、家族例会、ゴルフ、囲碁等)に誘われ大変お世話になってきた経緯もあり、「今度は私が皆様のお世話係

(2) 中部支部の経緯

前会計幹事の 前原恒之氏(昭28年卒)の資料等により「洛友会が創設された昭和28年の12月5日、中部支部の第1回総会が開催され初代支部長に名工大学長であった清水勤二氏(大12年卒)が選出された。」とあります。(当時の中部支部会員数は約120名)
昭和39年、第2代支部長には日本電話施設(株)やFM愛知を創設され、陶芸や狂言の世界でも有名な本多静雄氏(大13年卒)が就任さ

れました。本多支部長時代に私も、秋の日本電話施設主催の、志摩半島五ヶ所湾七日島の観月会に便乗して参加させていただいたのが懐かしく思い出されます。
昭和62年、第3代支部長に大野彰氏が選出されました。大野支部長は(株)岐阜乗合自動車の社長をされていた事もあり、秋の家族同伴例会では格別のご配慮により、白川郷、彦根長浜、高山、郡上八幡ほか多数の名所旧跡めぐりを企画され、私も家内と共に毎年楽しく参加させていただきました。

(3) 現状における課題と今後の対応

私が支部長を引き受けた時点で感じていた課題の最も大きいものは、支部行事に参加される会員がほぼ固定化され、総会時でも10数名であり、何とか若い会員の方々も気楽に参加してもらいたいという事でした。それ故、当地域で多数の会員を擁する、中部電力(株)とトヨタ自動車(株)(夫々のグループ会社を含む)の会員の方にお願いをして行事への参加を呼びかけました。
また、夫々の企業から副支部長として 小林郁生氏(昭44年卒)、杉谷達夫氏(昭和50年卒)に就任していただき、今後の夫々の企業のまとめ役としてご尽力いただく事としました。会計幹事として安藤和史氏(昭47年卒)、総務幹事として林靖人氏(昭和42年卒)、

松浦昌則氏(昭和53年卒)の各氏に就任いただき、支部役員の顔ぶれはかなり若返りました。なお、前支部長の 大野彰氏には、顧問として大所高所からご指導いただく体制となっております。
以上の体制で、昨年総会を開催した結果、33名の会員が参加いただき(一昨年の総会出席は16名)倍増し喜んでおります。
その他、支部の活性化に資する事として考えている事柄を以下に記します。

① 中部支部会員名簿の作成

平成15年度の会費納入会員数152名の名簿を作成する。これにより行事未参加者が把握でき、勧誘しやすくなり結果として出席率の向上につながり会の活性化に役立つものと期待される。

② 秋の家族同伴の例会の充実

私自身もそうであったように、一度参加すれば必ず喜んでもらえるかと確信できる行事であり、それが故に期待に込める内容を企画する側としては苦心するところではあります。会員へのアンケート結果等を参考として、その時々マッチした企画を作り会員の期待に応える所存です。

③ 支部会計の拡充

15年度からの繰越金が約500千円と若干心細くなってきました。支部支援行事の 囲碁、ゴルフ等の援助金、秋の家族例会への援助金にしても毎回必要となり、そのた

めにはもう少し貯蓄して行く必要があると思われま。それには、隔年の洛友会の名簿発行時の広告掲載時に会員企業からより多くの応募が望まれますので、今後は具体的にお願いをして行く所存です。

④ 支部HP(ホームページ)の創設

これは現状においてはすぐに計画、実現する事ではありませんが、近い将来支部の活動状況や行事の出欠席を自宅のパソコン又は携帯電話からできるようにし、また、本部とリンクする事により大学の最新情報等が入手できるようにすれば、会員にとっても利便性は高まるものと思われま。

(4) その他

今年4月1日より国立大学は独立行政法人となり、大学を取り巻く環境は抜本的な変革を遂げました。官的発想↓民的発想、国への依存↓自助努力、第三者による評価制度の導入、競争原理を背景とした大学の諸活動等々。私達同窓の人間として、これからの母校の将来に対して大いに関心もある所です。洛友会場の場を通じ学校の最新の動向について、現職の先生方から今後とも教えていただきたいと願う所存です。
また、昨年10月、桂キャンパスの一部(大学院工学研究科「電気系専攻」と「化学系専攻」)が稼働を開始したように伺っておりますが、まだ現地を訪れた事はなく、例えば秋の家族同伴の例会等の機

会を利用して見学会を開催するの
もよいのではと思っています。

最後に洛友会とは直接関係あり
ませんが、現在中部地区で進んで
いる大きなプロジェクト2つを簡
単にご紹介させていただきます。

まずその1つは、来年3月25日
（9月25日開催される愛知万博
（正式名称は2005年日本国際
博覧会）です。テーマは「自然の
叡智（Nature's wisdom）」で、会
場は長久手会場（約158ha）と瀬戸
会場（約15ha）で両会場はゴンド
ラで結ばれます。

自然と調和した会場づくりが会
場設計のコンセプトとなっていま
すが、参加国125ヶ国、参加国際機
関8機関と日本から政府、自治体
のほか主要な民間企業（トヨタグ
ループ、JR東海、日立、三菱、三
井東芝、電力会社、ガス事業会社
等）が夫々大型パビリオンを出展
の予定で、現在着々と建設が進行
中です。

また、会場までのアクセス交通
機関として藤ヶ丘万博会場（約
9.2km）を結ぶHSSST（常電導磁
気浮上式リニアモーターカー）が
世界で初めて実用化されます。現
在急ピッチで工事が進行していま
すが、騒音、振動が少ない環境に
やさしい都市型輸送システムとし
て愛知万博の目玉として注目され
ています。その他、会場内の移動
には無人自動運転・隊列走行が体
験できる新交通システム（IMT

S）も話題となっています。（詳
しくは協会HP：<http://www.expo2005.or.jp/参照>）

もう1つのプロジェクトは、知
多半島常滑沖に建設中の海上空
港、中部国際空港「セントレア」
です。事業主体の中部国際空港株
は3セク（国・地方自治体・民間
の出資比率4・1・5）で、開
港予定は2005年2月17日で、
これも現在急ピッチで建設が進ん
でいます。

また、主要アクセスとして名古
屋鉄道常滑線の空港駅までの延長
工事と空港建設工事も進行して
います。これら2大プロジェクト
は中部の活性化、話題性に大きく
寄与していると思います。洛友会
の皆様方も来年是非名古屋へお越
し下さい。

大学の動向

4月1日、国立大学法人京都大
学が発足したことに伴い、副学長
8名の中に、松重和美（国際融合
創造センター長）教授が任命され
た。任期は平成17年3月31日まで。
（京大広報、No.589号より）

教室だより

教官の異動

定年退官（平成16年3月31日付）

○奥村浩士教授（電気システム論
講座 電気回路網学分野）

○牟田一彌教授（電磁工学講座超
伝導工学分野）

○倉光正巳講師（複合システム論
講座）

新任（平成16年3月1日付）

○小林哲生教授（電気エネルギー
工学講座生体機能工学分野）

北海道大学電子科学研究所助教授

教育と研究の回想

奥村 浩士（昭41年卒）



私は今年3月31日をもって定年
退官いたしました。学生時代を含
めますと40年以上も電気系教室に
お世話になり、その間先輩の先生
方や会員の皆様にはご指導とご鞭
撻を賜り、心から感謝いたしてお
ります。大学院博士課程退学後の
昭和46年4月、好運にも電気工学
第二教室の助手として採用されま
した。私はいわゆるラジオ少年で
ありましたが、机上でできるもの
よりも机上でできない大きなこと
に関心が移り、送電に大変な興味
と魅力を感じ、電力系統構成学講
座を担当されておられた若い木嶋
教授の研究室の卒研生になりました

た。先生とのこの出会が今日の私
を作ったと言っても過言ではあり
ません。先生には25年間ご指導い
ただき、学問のおもしろさやたの
しさを教えていただきました。こ
こで、思い出すまま簡単に足跡を
振り返ってみます。

1 教育のこと

学部学生には「電気回路基礎論」
（旧「電気回路I」）、電気回路
（旧「電気回路II」）、大学院では
「電気回路特論」、このほか、「基
礎電気工学」では「ベクトル解析」
を講義しました。これらの講義に
ついては「京大電気系の卒業生は
さすがによく分かっている」とい
う評価をいただくようにとの願
いから、分かりやすく講義してきた
つもりです。この思いがどの程度
学生諸君に通じたかは知りませ
んが、心に残っていることがありま
す。最終回の「ベクトル解析」の
講義を終えると学生が拍手をして
くれたことです。そして、数人の
学生が教卓にきて「ベクトル解析
がよく分かりました。ありがとう
ございました」とお礼を言ってく
れたことです。また、交流理論で
 d/dt を $j\omega$ と置けば、なぜうまく
交流回路の計算がスムーズにでき
るのがもうひとつ分からないとい
う声をよく耳にしました。そこ
で「電気回路基礎論」ではこれに
応えるような講義をし、新しいタ
イプの「電気回路理論入門」を著
しました。「学生実験」では「直

流れ」を主として担当しました。
同期発電機に負荷をつなげば、端
子電圧は通常下がると思われてい
ますが、コンデンサ負荷を設置し
端子電圧が上昇する実験を組み込
んでもらったことなどが思い出さ
れます。

2 研究のこと

昭和46年教授の担任が電力系統
構成学講座から電気回路網学講座
へ代り、私も講座を移りました。
そのため、研究テーマも送電関係
から電気回路網学という基礎の方
面へと徐々に変更していくことにな
りました。ここで、これまで行
ってきた研究を大まかに表します
と図のようになります。研究内容
は非線形回路、分布定数系および
回路設計の研究に分かれます。図
の四角の枠は研究テーマです。ア
ンダーラインを付してある語句は
それに用いた数学あるいは数値計
算技術で、矢印はそれとテーマと
の関連を表しています。この3つ
の中から、すこし述べさせていた
だきます。

（a）非線形回路の研究

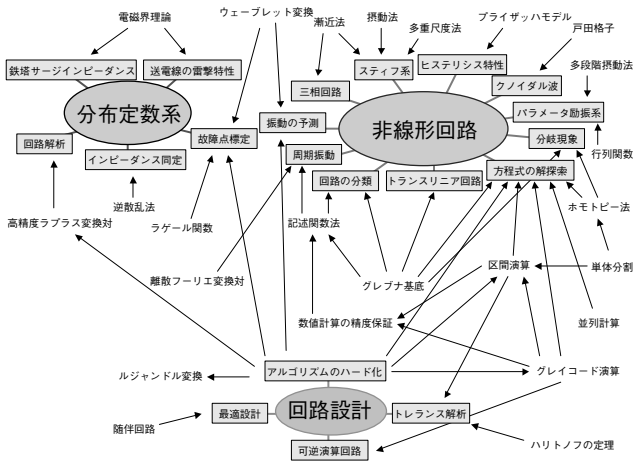
大学院では大変興味ある送電系
統の非線形振動の研究を行いました。
最初にお薦めいただいた論文
は後藤以紀著「送電系統の電氣的
不安定現象」（電気学会雑誌、昭
和6年）およびそれに関連する論
文で、昭和2年に起こった猪苗代
送電線の異常現象の解析につい
て書かれていました。そのなかで、

波形について、いつまでも腑に落ちない点が一つありました。それは、高調波を含む正弦波状の振動が上昇して行き、ある時突然位相が逆転して下降することを繰り返すというものでした。この原因についてはどこにも書いてなく、昭和42年以來ずっと何故こんな波形が現れるのか疑問を持ち続けておりましたが、つい最近になって変圧器の励磁特性を多項式からエクスポネンシャル関数で近似することにより、損失のないキャパシタと非線形インダクタの三相回路は3粒子系の戸田格子の方程式系で記述されることが明らかになりました。この系は可積分系で厳密解が存在し、クノイダル波という特

殊な波が生成され、この自励振動に外力が重畳した波が猪苗代送電線に観測された波形であることが分かりました。ホモトピー法での存在を明らかにし、室内実験でも観察しました。平成13年4月のことです。戸田格子の発見は昭和35年以降ですから、猪苗代送電線は時代を先取りしてクノイダル波を発生していたのです。まさに、温故知新とはこのことでしょうか。

(b) 分布定数回路系の研究

送電鉄塔のサージインピーダンスを電磁界理論によって計算する研究を契機に、サージインピーダンス測定に及ぼす計測線の影響や格子状に配置された部材を流れる電流進行波がもたらす電磁界によるサージインピーダンスの厳密計算の研究をしました。この研究は超集積回路で問題となる伝送線路の相互誘導現象(クロストーク)を積分方程式や数値ラプラス変換を用いて厳密に取り扱う手法の研究へと発展し、現在でもCOEのバックアップで実験が進行しています。FFT型の数値逆ラプラス変換は従来所望の時間区間の後半部で誤差が大きくなるため、使い物にならないと思われていました。前処理と後処理を工夫することによ



り、極めて高精度に所望の時間区間で計算が可能となりました。これにより数値ラプラス変換は順逆変換ともペアとして実現でき、非線形終端の伝送線路が容易に解析できるようになりました。

(c) 回路設計—アルゴリズムのハード化

回路設計の研究では当初は随伴回路を使ったアナログ回路の最適設計法などを研究しておりましたが、近年の書き換え可能なゲートアレイの出現によって、ソフト感覚で回路設計ができるようになり、これまでの数値計算アルゴリズムをハード化することを計画し実施してきました。ウェーブレット変換と相関関数の計算のハード化による伝送線路の故障点標定装置の提案、非線形方程式の全探索アルゴリズムのハード化など10年以前では考えられないことが実現できるようになりました。この技術を使って先述のFFT型逆ラプラス変換のプロセッサを構成し、関西TLOから特許出願をしています。一方で、「コンピュータの計算結果は本当に正しいのか」との長年の疑問から精度保証計算アルゴリズムを提案し、そのハード化などを実現してきました。

私は「研究の見通しがつくまでは自らがやり、見通しをつけたらそのテーマは後輩に譲り、自らは新しいテーマへ。地味ではあるが着実な一歩を」という方針で研究を進めてきました。このような方針の下では時代を意識し常に新しい問題の発見に勤める努力と勉強が怠れませんので、必然的に研究の幅は拡がりました。

3 体育会や桂キャンパスの駐車場ことなど

学生時代から柔道部員として課外活動に従事していましたので、柔道部長をつとめ、退官する年までの3年間体育会会長として学生の体育活動を支援してきました。京都大学には48の体育会所属の部が存在し、教授43名助教教授5名が部長となり学生のスポーツ活動を支援しています。七大学のなかで、京大はスポーツの非常に盛んな大学で全学部生の三分の一強が体育会の会員になり、OB会も非常に熱心です。体育会出身の教授も多数おられます。これに反し、その施設や設備は極めて貧弱で老朽化が目立ちます。柔道場では畳が波打ち、練習や試合中に足首が捻挫します。艇庫の老朽化対策、プールの温水化、ラグビー場の整備など多くの難題が山積しています。部長会ではこれらの問題を審議し、当時の長尾総長はじめ、副学長、事務局長に要望し、独立行政法人化後の中期目標・計画の中に学生支援の一環として、施設・設備の整備と充実を盛り込んでいただきました。これから、その計画がどのように実行されていくのか見守っていききたいと思っております。

最後の4年間に、専攻長をほぼ2年連続、つづいて学科長を1年間、それに桂キャンパスの電気系WG委員長を移転完了まで、更に移転後は桂キャンパス交通委員長を努めました。「国有地を駐車場にして収益を上げてはいけない」というルールが厳然とあり、一方で駐車場は有料制に決まっておりましたから、この問題をどう解決するかを悩ませやとと規程のたたき台を作成し、次期委員長に引き継いだのが退官の2週間前でした。4月1日からは高木俊宜名誉教授のお世話で広島工業大学に勤務しています。

文末になりますが、退官までご支援ご協力をいただいた研究室の皆様、また大学院生・学部学生の皆様方に厚く御礼申し上げます。

「退官に当たって」

牟田一彌 (推薦会員)



この度、平成16年3月31日をもって、京都大学を最後に定年退官致しました。省みますれば、前任教員生活を送り、無事に終止符を打つ

最後の4年間に、専攻長をほぼ2年連続、つづいて学科長を1年間、それに桂キャンパスの電気系WG委員長を移転完了まで、更に移転後は桂キャンパス交通委員長を努めました。「国有地を駐車場にして収益を上げてはいけない」というルールが厳然とあり、一方で駐車場は有料制に決まっておりましたから、この問題をどう解決するかを悩ませやとと規程のたたき台を作成し、次期委員長に引き継いだのが退官の2週間前でした。4月1日からは高木俊宜名誉教授のお世話で広島工業大学に勤務しています。

文末になりますが、退官までご支援ご協力をいただいた研究室の皆様、また大学院生・学部学生の皆様方に厚く御礼申し上げます。

ことができました。佐賀大学には25年6ヶ月間、京都大学には8年6ヶ月間在任し、皆様のご厚情を賜り最後の国立大学教官の一員として勤めを果たすことができました。とは私にとつて感無量です。また、京都大学を去るに当たり、皆様の身に余るご後援を頂戴し、本年3月5日に恒例の最終講義を行うことが出来ましたこと、今後一生の想い出として忘れることはないでしょう。

京都大学在任中は、単身赴任で、正直個人的には生活に不自由も少々感じましたが、スタッフの皆様方のご協力もあり、教育研究に専念することができました。また、短期間ではありましたが大学や教室運営など参画でき、京都大学の教育研究・運営方針など、学ぶことができ、伝統の重みを深く印象付けられました。一方では、公設機関・研究所、民間団体・企業、学会等との繋がりを身近に感じ、身に余る責任ある役割を務めさせて頂き、またそれら関連機関の多くの科学技術等関係者との交流を深める中で、私自身大きく成長致しました。ここに、夫々の関係各位に重ねて深謝致します。

私が電気工学を志すきっかけとなったのは、太平洋戦争敗戦直後の復興時期に過ごした小学生時代に遡ります。全国電化運動の最中、田舎の照明が白熱電灯照明へ展開していた当時、各家庭に普及しつ

つあった真空管を使ったラジオの故障修理が原点です。勉強では落ちこぼれ常態だったのを癒したのが機械いじりや図画工作、自然での魚や鳥捕りなど、に関心を持ったことです。結果として、他の科目は評価1、2点とさっぱりでしたが、理科や図画工作など、観察と手先の器用さで評価4、5点を取るのに苦労しなかったことと、小学上学年と中学の担任が理科の先生であったことが、私の志を決定的なものとなりました。その達成のために四当五落の受験戦争時代に猛勉強、1960年電気工

学科に入学した次第です。その間、朝鮮動乱の特需景気で産業活動が活発になり景気が上昇、加工産業立国・日本では、1960年代初期の中近東地域での石油発見がその後エネルギーや工業製品等の原料となり、石油化学産業が大きく伸長した。一方1960年代半導体産業が急進し、日本のその後の物造りを支えた。私の大学時代は未だ半導体や今日で言うIT技術の教育はなく、未だもってその分野の本格的学習ができず、アナログ時代になかった現在のデジタルIT技術の躍進には着いて行けない焦燥感さえもって今日に至っています。総じて、科学技術は私が単純なきっかけで志を持った時代とは大きく変貌し、カオスの今日の国の命運を賭けた知的戦争の中で、青少年への確たるインセンテ

イブを語るものを知らない。しかし、ソフトでアナログ的体験は少年期に必要であろう。

第二次世界大戦終結から60年間、世界や日本の技術躍進は史上空前のものとして歴史に銘記され、如何なる科学技術史上の評価を受けるか、関心は深まるばかりである。少なくとも日本の戦後の生活環境は飛躍的に向上したものの、世界的な南北の生活格差、地球規模の人間環境への負の遺産問題は、21世紀の課題としてクローズアップされている。

さて、京都大学に8年6ヶ月間の在任中、大きな出来事の一つは工学研究科の移転で、我が電気工学・電子工学専攻は桂キャンパスに最初に化学系と共に2003年8月9月に移転した。1995年10月より私が親しんだ吉田キャンパスを離れ、幸いにも半年間新キャンパスで過ごすことができた。吉田キャンパスに赴任した当時の吉田キャンパスで、手狭さと迷路のように走る道路・建物を繋ぐ廊下、平均自由行程の短さ等に辟易したものだが、移転すると何時の間にか吉田キャンパスに慣れ親しんでいた自分を見出し、「慣れ」の怖さを想起する。引き続き多くの専攻や情報学研究科が移転する計画であるが、言うまでもなく教育と研究のためにはアクセスの交通、教職員や学生の厚生施設、住環境や憩いの場所造りも課題と

して早期に進展することを望みたい。また、一つの想い出に残る行事は1998年の電気工学科設立百周年記念であった。多くの先達を輩出してきた京都(帝国)大学創立から一年遅れで、西欧列強国にキャッチアップするために「富国強兵」策を推進した明治政府にとつて重工業技術の教育と研究が如何に重要であったかの証としてエポックな創立であったであろうことが、この記念行事に当たり想い起こされた。この視点を現在に当てはめれば、限界状態にある科学技術上の発見・発明を期待は抱きつつも、科学技術政策の拠り所を人間中心に振り向けるコンセプトを創り出す使命を京都大学は課せられているのではないか。

お叱りを覚悟で言うならば、財務内容が思わしくない日本の現在の科学技術の国家レベル施策が国益を重視する方向「知財立国」に傾倒していることは否めない。つまり「経済」戦争は「技術立国」から「知財立国」へとスローガン展開に現れているのではないか。「スロー・フード」は今や弊害が顕在化している「ファースト・フード」に対抗して言われるキャッチコピーである。それと同様に、科学技術の世界でもファースト・フードならぬ「実用化」「期待される経済効果」等、昨今研究費申請には付き物になっているキーワードがある。科学技術の研究者は

コストパフォーマンスを考えて人に役立つ実用化を目指すべきこととは否定しないが、行き過ぎの感を抱く。最近特に、例えばデジタル家電開発が景気浮上や物造り空洞化の回帰に繋がっていると、日本技術力の強さの復活が見られる。これら家電製品はシステム製品であり、システム化技術で日本が世界を凌駕していることは誇りとした。しかし、外国勢の追い上げもあるが、日本国内でも開発競争はすさまじい。家電製品の販売価格は1年後、半分以上になるとい。従って、メーカは今や3ヶ月に一品、年4回の新製品を出し、販売開始2ヶ月間で勝負する厳しい競争に晒されている。これは一面、短期決戦を求められるだけで技術者にとつて疲弊を招きかねない過酷な研究開発環境にあると言わざるを得ない。

京大を問わず全国的に電気電子工学科の志望者が減り、トップレベルにあった入学試験合格者の得点も工学分野で低レベルにある。しかし、これに臆することなく未来志向の研究開発を、京都大学に望みたい。京都大学に赴任後、独特の研究開発ムードを体感した。基本的知財となる原理原則やシステムモデル等を研究する所と認識したが、この理解は間違いであろうか。既に普及しつつある研究開発には手を出さず、最初は奇抜とも観られる新規性・創意高い先導

コストパフォーマンスを考えて人に役立つ実用化を目指すべきこととは否定しないが、行き過ぎの感を抱く。最近特に、例えばデジタル家電開発が景気浮上や物造り空洞化の回帰に繋がっていると、日本技術力の強さの復活が見られる。これら家電製品はシステム製品であり、システム化技術で日本が世界を凌駕していることは誇りとした。しかし、外国勢の追い上げもあるが、日本国内でも開発競争はすさまじい。家電製品の販売価格は1年後、半分以上になるとい。従って、メーカは今や3ヶ月に一品、年4回の新製品を出し、販売開始2ヶ月間で勝負する厳しい競争に晒されている。これは一面、短期決戦を求められるだけで技術者にとつて疲弊を招きかねない過酷な研究開発環境にあると言わざるを得ない。

的研究を行うのが京都大学の伝統であらうと思っている。従って、現実的な実用化要求をも探りながら、私は研究に没頭できた。有り難いことに、足をすくわれるものとなく一生懸命、これこそ大学だ、と今まで経験したことがない納得できる教育と研究が充分出来た。法人化後、大学を取り巻く環境は厳しさを増すばかりであるが、京大のような教育や研究環境は今後も失ってはならないと考え、後輩諸氏にエールを贈りたい。

京都大学大学院の電気工学専攻に在任した8年6ヶ月の期間は私にとって大学教師生活34年間の4分の1にすぎませんが、諸先輩・

後輩諸氏の築いた伝統を遠慮なく満喫し、有意義な人生の一時期を、将来を担う学生諸君と共に生活できたことを誇りとしています。

合わせて末筆ながら、電気系同窓会「洛友会」の活動に厚く御礼を述べ、今後もお付き合いをお願いして、改めてここに敬意を表します。

(追伸) 私は故郷・佐賀に還っています。今後「洛友会」九州支部にお世話になります。今までも益してご指導・ご鞭撻の程、宜しくお願います。また、佐賀にお越しの折には、同窓会の皆さん、声をかけて下さい。有明海の「ムツゴロウ」君も愛嬌良く、「有田

長尾真先生 京都大学退官記念パーティのお知らせ

長尾 真先生(昭34年卒)には、総長の任期満了により、平成15年12月15日をもって京都大学を退官されました。つきましては、京都大学電気系教室、情報系教室、および旧長尾研究室関係者が中心となり、左記のとおり退官記念パーティを開催することとなりましたので、ご案内申し上げます。

日時 平成16年9月25日(土) 午後3時30分より7時まで

場所 ウェスティンホテル東京 京都市東山区三条ヶあげ電話 075-771-7111

一、退官記念講演会

時間 午後3時30分より4時30分まで

会場 西館三階 コスモスホールにて

講演者 長尾 真先生 題目 「学問のこれから」

二、退官記念パーティ

時間 午後5時より7時まで

会場 西館四階 瑞穂の間にて

連絡先 〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学大学院情報学研究科 知能情報学専攻

電話 075-753-4891 FAX 075-753-4769

松山 隆司 (E-mail: tm@kyoto-u.ac.jp)

焼」の皿の上で、日除けの黒い「佐賀海苔」を頭に被り、飛び跳ねながら待っています。

2004(平成16)年6月吉日 佐賀県佐賀市にて

洛友会京都大学電気百周年 記念事業決算報告

本事業は、母校京都大学電気系関係研究室の研究活動を産業界にお知らせする情報誌「Cue」を発行して、産・学連携活動の活性化に貢献するという目的の事業を続けております。平成15年度は「Cue」11号と12号が発行されました。この情報誌は百周年記念事業にご協力頂いた洛友会会員の皆様にもお送りしておりますので、電気系教室関連研究室(洛友会会員の出身母体)の活動状況を皆様にお知らせするメディアとも

なっております。一方賛助会員も15年度は、鉄道情報システム(株)、ダイキン工業(株)、フジテック(株)、(株)村田製作所、日立電線(株)の5社からご協賛頂き大変感謝しております。引き続きのご支援をお願い致します。また洛友会会員の方々と、ご所属の企業があらたに賛助会員としてご協力

いただける場合には、本記念事業事務局 (Tel: 075-752-5777, Email: joun@osk43web.ne.jp)、または洛友会本部事務 (Tel: 075-701-3210, Email: rakyuu@seadial.or.jp) にご連絡頂けましたら入会申込書をお送りいたします。以下に収支決算のご報告を致します。なお決算の監査は5月26日、工学研究科電気工学専攻の引原隆士教授にお願いいたしました。

記念事業幹事代表 木村 磐根(昭30年卒)

平成15年度収支計算書 平成15年4月1日～平成16年3月31日

収入の部 (単位:円)

Table with 3 columns: 収入の部 (単位:円), 金額, 内容. Includes 賛助会費, 利息収入, 雑収入, 収入合計, 前期繰越収支差額, 収入合計.

支出の部 (単位:円)

Table with 3 columns: 支出の部 (単位:円), 金額, 内容. Includes 事業費 Cue刊行費, 管理費, 事務委託費, 通信費, 支出合計, 次期繰越収支差額, 支出合計.

財産目録 (単位:円)

Table with 3 columns: 財産目録 (単位:円), 金額, 内容. Includes 現金, 普通預金, 定期預金, 郵便貯金, 資産合計.

平成16年5月26日 上記収支計算書並びに財産目録を確認しました。 署名人 引原 隆 士

会員寄稿

水の惑星・宇宙船地球号

奮野 信義(昭34年卒)

この頃、地球が大分暖かくなっていることが、誰にも実感されるようになって来た。

人間活動が原因で起こる地球環境の悪化については、オゾン層の消滅、地球温暖化、熱帯雨林の消滅、砂漠化、化学物質汚染...、いろいろ挙げられているが、人類の滅亡といったグランドスラムに直接繋がる可能性が一番高いのは温暖化であると思われる。

地球の四十数億年に及ぶ歴史の中かなり長い期間に涉って、地球表面の温度が、ほぼ±50℃の間に保たれて来たのは、太陽表面コロナの百万度から絶対零度に至る太陽系の環境の中では奇跡に近い。地球と双子星のように生まれた金星は、今厚い炭酸ガスの雲に覆われた焦熱地獄である。何処で運命が分かれたのか。

比較的最近でも(と言っても地球の寿命に比べてのことであるが)地球表面の炭酸ガス濃度や温度が、今よりズット高かったことは珍しくない。しかし、それらは万年のオーダーでの変動であり、多くの生物は変動する環境へ適応する進化や自然淘汰を重ねて生き延びてきた。しかし今我々の問題

は、太陽系の長いタイムスケールでの環境変動のうねりに乗る人類活動の影響による十年単位の変動が、人類や多くの生物の生存限界をハミ出す可能性が見えてきたことなのである。

昔々、宇宙塵の大きな渦巻きを中心に太陽が出現し、その回りの宇宙塵がいくつかの惑星に纏まって太陽系が出来た。その頃の地球は他の惑星同様、隕石が降り注ぎ、溶岩の塊のようであったと思われる。隕石に含まれる水分や沸点の低い物質は全て蒸発し、上空に厚い雲となっていた。そしてある時、地球には大雨が降って水の惑星となった。

しばらくして、地球の海の中には原始生物が発生したが、降り注ぐ紫外線で陸上は生物が生存出来ない状態ではなかった。大気中の水蒸気が太陽放射で分解され出来たオゾンの層が紫外線を吸収するようになり、生物は陸上に進出し多様な進化を遂げた。1980年代初頭、我が国の南極観測隊のデータから所謂オゾンホールが存在と拡大が見えられた。このまま行けば地球上の紫外線強度が上がり、生物に重大な影響が出ると危惧された。

1980年代半ば、その原因物質と思われるフロンガスの規制のために、急遽開かれた一連の国際会議では、どの国も規制には大変リラクタントであった。しかしそ

の後、フロンガスの製造・使用の制限・中止、他の物質への転換がドンドン前倒しで進んだ。これはオゾン減少のメカニズムが比較的単純で、その因果関係が誰の目にも明確になったからである。一方温暖化の方は、長短幅広い時定数を持つ種々の自然現象や、全てが把握されてさえない様々な原因・要因が複雑に絡み合い、メカニズムの全貌解明にはマダマダ距離がある。このため人々は危機を実感出来ず、問題は先送りされ、事態はドンドン悪化していく。しかし、私たちの本能は今既に何かを嗅ぎ付けたのではないか。

人類滅亡の危機は核でも在ったが、核ミサイル発射のカギは超大国の一握りのエリートが持っていた。地球温暖化のカギは、人類ひとり一人の手の中にある。地球温暖化問題は、個人やグループ、企業や国のエゴをどれだけ人間の英知が制御出来るかに懸かっている。言うなれば、『エコの問題はエゴ』の問題なのである。

リオ地球サミットの前年(1991)、私は『ジオ・カタストロフ1』：99年後(2090年)に人類は滅亡する』という警告シナリオを作るグループに加わったこと

がある。東西各6人のメンバーは、私を含めた3人の宇宙科学・地球環境科学に関わる研究者以外は、経済学者、経営学者、民族学者、医者、評論家、弁護士、TV

ディレクター、作曲家、SF作家等いわゆる文化人であった。「人類はアト百年生き延びられるか」から議論を始めた。私達3人の意見は揃って「このままではトテモ無理」であったが、文化人達は「科学の進歩が解決してくれる」「経済や社会システムの自律機能が解決する」から「愛は地球を救う」迄理由は様々ではあるが、全て「大丈夫ダロウ」というものであった。しかし議論が進むにつれて、皆例外なく「これは無理カナ」と思うようになって行った。そして三幕(各33年)もののシナリオが出来た。

第一幕(1992-2024年) 人々は「このままではマズいな」と思いながら、ズルズルと何もしない日が過ぎて行く。これはマサに今の我々の状況ではないか。

第二幕(2025-2057年) イヨイヨ環境の悪化がハッキリしてきて、人々はトウトウ行動に移らざるを得なくなる。それは消費や生活の幅広い範囲にわたる自制・抑制、様々な規制の導入にならざるを得ない。社会的監視も厳しくなる。

第三幕(2058-2090年) このような状態が30年も続くと、経済は疲弊し、生活の質は下がり、自由が制約され、将来に夢も希望も無くなる。「俺だけならイイカ」とコソソリとズルをする個人が出て来る。それがグループ

へ、コミュニティへ、国へと拡がり、自分達だけが生き残ろうと、世界中が血みどろの争いになり、人類は滅亡する。

その頃、ユーゴスラビアでエゴ剥き出しの血みどろの人種・宗教争いが進行していた。

最近の天文学(望遠鏡製作技術)の進歩により、星や銀河が、マサに天文学的スケールでドンドン新たに発見されている。それらの中で高等文明の発生する確率はかなり高いと考えられている。しかし、ふたつの高等文明が同時に存在する確率は殆んど無いと言われる。百数十億年にも近い宇宙の寿命に比べて、高等文明の存続するであろう時間が非常に短いのである。人類文明が発生して既に数千年、我々はいヨイヨ滅亡に向かつて走り出したのか。人類の知性がこれを救えるのか。

今世紀のエネルギー

前川 則夫(昭36年卒)

について(Ⅲ)

1. 前回までに温暖化問題や世界各国のエネルギー安定確保の取り組み状況などについて解説した。本稿では我が国の資源確保やエネルギー効率向上へ向けた取り組み状況などを紹介するとともに、京都議定書で地球温暖化防止のために掲げた目標値を超えて増え続ける化石燃料の使用、炭酸ガスの放

出量に着目しながら議定書の問題点を解説する。

2. (日本がエネルギー資源を依存している国々)

資源小国日本も石炭をエネルギーの重要な選択肢に加え、石油・天然ガスなどの化石燃料及びウラン燃料を基幹エネルギーとしてエネルギーの安定確保に努めている。輸入先を見れば石炭はオーストラリア約60%、次いで中国、インドネシア、カナダ、石油はアラブ首長国連邦、サウジアラビア、イラン等アラブ諸国が約87%を占めている。液化天然ガス(LNG)はインドネシア約33%、次いでマレーシア、オーストラリア、ウランについてはカナダ、オーストラリアなどとなっている。

3. (原油価格の変動)

石油は73年の中東戦争の勃発とともに、アラブ産油諸国は石油を武器として原油価格の引き上げとイスラエル支援国への禁輸などを行った。原油価格はバレル3ドルから116ドルに高騰し価格支配力はOPECに移り、さらに79年のイラン、イラク戦争によって34ドルまで高騰した。このため、非OPEC諸国は北海油田などの原油生産を増大させ、同時に、石炭・天然ガス・原子力へシフトさせた結果、逆に原油価格は10ドル台の低位が続いてきた。しかしながら、ここ数年は小幅な変動を繰り返しながら上昇を続け、中国等の著しい発展を背景として40ドルをうかがう展開になっている。長期的に

見れば石炭、石油価格は強含みの展開になると思われる。

4. (資源確保の外交)

石油は2010〜30年の間に生産のピークを迎えるリスクがあり、日本はアラブ諸国に87%も依存していることから安定確保の取り組みが強く求められている。

①日本は最大級の自主開発油田であるサウジアラビアのカフジ油田で石油権益を失ったが、その後イラン・アザダガン油田(確認埋蔵量260億バレル)の権益確保に取り組んできた。イランが核疑惑を解明するまで開発計画の調印を延期すべきとの米国の立場に配慮しながらも、ようやく04・2月に開発の基本合意に達した。

②また、03年、日本政府はリビアへの経済援助を始めようとしている。リビア原油の産出量は130万バレル。国連制裁以来開発投資が滞り、70年代の330万バレルから激減していた。イラン、リビアに欧州各国、中国は熱い視線を送っている。

③目下進められているロシアとの間では年間石油輸送能力5000万トンのバイカル湖南端のアンガルスからナホトカへのルート建設問題があり、サハリン沖の石油・天然ガス開発事業は日本国内需要向けに07年から供給が始まる予定である。

5. (深海油田の開発)

世界に目を向けると欧米石油資本がメキシコ湾や西アフリカ等で深海油田の開発を加速している。

原油高や技術革新で、コストの割高だった深海油田の開発が採算に合ってきた。深海油田は水深450m以上の海底にある油田を指すが、最近では1500m以上の超深海油田の開発も増えている。現在の深海油田の生産は日量約400万バレル、07年にはサウジの日量に相当する800万バレルになるとの推計もある。

6. (天然ガス需要の増大)

世界の液化天然ガス(LNG)の消費量は年間約1億2000万トン。世界のエネルギー消費の数%に過ぎないが今後10年間で倍増する見通し。LNGの最大消費国は日本であるが、今後需要増が予想されるのが中国と米国。LNG生産設備の新設・増設計画は目白押し。中東、インドネシア、ナイジェリア、アングラ、ロシア・サハリン等。現在、世界の天然ガス市場は産地から気体のまま送るパイプライン方式が主流だが、需要拡大に備え、米国や中国ではLNGの受入基地の整備計画も進んでいる。

7. (メタンハイドレートの開発)

①経済産業省は03年度、海底に大量に埋蔵し、未来の国産エネルギーと期待されているメタンハイドレートを日本近海で掘削する研究に乗り出している。本州沿岸、東海沖から熊野灘にかけて南海トラフの深さ700〜2000mの海域。メタンハイドレートのサンプルを採取して、その状態を出来るだけ維持して地上まで運ぶ。13年後の実用化を目指しているとのこと。

②メタンハイドレートは天然ガスの主成分のメタン分子を水分子が取り囲む氷状の固体。本州近海の埋蔵量は国内天然ガス消費量の100年分(74兆m³)、石油換算68億トンとの試算もある。200気圧深海での掘削し、低温で引き上げる技術開発がキー。メタンガス燃焼による温室効果は石炭の半分、石油の4分の3程度。ただし、メタンガス自体は炭酸ガスの20〜50倍の温室効果を持つ。

8. (超重質油の実用化研究)

超重質油は南米やロシアに広く分布しており、確認された埋蔵量は約1兆バレル。石油に匹敵する。日本国内でも研究が進められている。高温高压の超臨界水の密度を最適に制御することで分子間結合を分解し、粘度を低減。硫黄もA重油クラスまで除去出来るという。

9. (エネルギー利用率の向上)

エネルギー利用率の尺度の一つに「一次エネルギー供給の対GDPの原単位」という指標がある。1億円のGDPを創出するのに、原油換算でどれだけエネルギーを消費したかを示す指標。日本は73年のオイルショック時に比べて35%もの改善がなされ、1人当たりの消費量でも85%程度の水準になっており、先進各国に比べて我が国のエネルギー利用率は極めて高い水準にある。

10. (化石燃料の新しい効率的な利用形態)

①日本ではエネルギー回生型ハイブリッド自動車

が実用化されている。日経エコロジーによればガソリン車は新型でも総合効率は14%程度、しかしながら、エネルギーを回生利用するハイブリッド車は総合効率32%、燃料電池車29%程度にエネルギー利用率が高められてきているという。

②一方、欧州では軽油で駆動可能で、ガソリン車より熱効率が高く、石油を効率よく使用出来るディーゼル車を環境にやさしい車として開発している。

③定置型燃料電池については1kw程度の発電と排熱利用を併用する装置の開発競争が行われている。エネルギー総合効率80%程度が目標という。

④火力発電所の熱効率の推移を見ると、1950〜65年代の熱効率は30%程度。最近では平均で40%程度。ガスタービン併用型発電所では熱効率55〜60%の達成を目指して開発が進められている。

⑤素材のリサイクル。アルミ缶のリサイクル率は83%程度。アルミ缶から再生地金を作るエネルギーはポークサイトから作る時に必要なエネルギーの10分の1以下という。また、年間5000万トンにも上るスクラップ鉄を電炉で溶かし、新しい技術を用いればエネルギー消費は9分の1程度になるという。

11. (社会インフラとエネルギー消費)

1トンの貨物を1km運ぶのに消費するエネルギーは、鉄道を100として比較すると、海運が38、自動

車は1412となる。また、一人を1km運ぶのに消費するエネルギーは、鉄道を100として比較すると、バスが323、海運956、乗用車1177となる。日本ではエネルギー消費の4分の1が運輸部門であり、ドアからドアの便益を忍べばエネルギーが大量に節減出来る。エネルギー消費と炭酸ガスの放出量の少ないインフラの構築が今世紀の重要な課題となる。

12. (資源問題の重要性)

これまでに述べたように石油は2010年から30年の間に生産のピークを迎える可能性があると言われている。我が国の石油依存度は約50%・中国の石油需要の急増、アラブ諸国など供給国での権益の争奪、深海へ進む石油、ガスの掘削地点、石炭など化石燃料起源の水素利用推進を掲げる米国の石油代替政策などを概観すると資源確保、エネルギーの安全保障への取り組み強化が一層求められるであろう。

13. (温暖化防止の為の京都議定書)

CO₂排出量の抑制をめざす京都議定書では先進各国が08年から12年の間に90年比5%削減、日本は6%削減する議定書を取りまとめた。議定書は批准国の排出量合計が参加国全体の55%に達した時効力を発生することになっている。参加国のなかで大きなシェアを持つ米国、ロシアが批准せず、発効に

14. (京都議定書の問題点)

①03年、ミラノで開催されたC0

P9の温暖化防止条約事務局の推計によれば、炭酸ガスは世界全体で90年比00年13%、10年30%、30年90%増と予想されている。京都議定書の最大の問題は世界の化石燃料使用量の著しい増加が議定書に参加した先進国ではなく、発展途上国によって引き起こされていることである。議定書参加国は先進国に限定されており、参加諸国の排出量をたし合わせても00年で世界全体の30%程度にしかならない。00年における世界の炭酸ガス排出量を国別に見れば米国24%、中国13%、ロシア6%、日本5%、ドイツ3%などである。このうち米国、中国が参加せず、3位のロシアも批准を見合わせている。米国は科学的に完全に実証されたとはいえない、排出削減義務を負わせられると経済面で大きな犠牲を強いられるとしている。

②先進国の10年時点の排出量予測は全体で90年比102%増、国別では米国32%増、日本は5.7%増などであり、京都宣言で目標とした先進国全体で90年比5%減には程遠いのが実情である。

③京都議定書目標を達成するために必要なコストを比較すると米・欧・日本の比率は2・3・4になるといえる。ドイツや英国は老朽化した石炭火力を改良するだけで排出量を大幅に削減出来る。さらに、東西ドイツの合併効果や英国の北海油田からの天然ガスの導入など、好条件をいれるとコストはこれ以上の開きとなり、日本の不利

は明白。欧州主要国のCO₂削減状況をみると、ドイツは20%、英国は12%という大幅な削減を実現しているのに対して、日本は様々な努力にもかかわらず8%増になっている事情がこれを裏付けている。

④従って、京都議定書が発効し、先進諸国が目標を達成したとしても、中国など先進国の仲間入りを急ぐ国々の影響の方が大きく、温暖化速度を多少遅らせる程度の効果しか持たないのが現実であり、国際社会の利害を越えた対応が求められている。(次号に続く)

超電導リニアの現状と今後

藤江 恂治 (昭37年卒)

1. はじめに

超電導リニアは研究開始から36年経過し、国として国土交通省の運輸技術審議会鉄道部会超電導磁気浮上式鉄道実用技術評価委員会(平成9年1月設置)筆者は特別委員)が平成17年3月末に実用技術の最終評価をし、実用化へ向けての技術的な方向性を出すことになっていきます。

一昨年、長尾総長(当時)を山梨実験センターにご案内して超電導リニアにご試乗いただいたとき、その最先端総合技術の高さをご評価いただきました。また、樋口廣太郎氏や豊田章一郎氏ほか、多くの方々から実用技術の完成度の高さをご評価いただき、研究開発当初から関わってきたものとして感激しています。

2. 山梨実験線の現状

超電導リニアの研究開発は昭和43年から始まり、旧国鉄道技研での超電導基礎実験、実験車の浮上、推進、案内試験、宮崎実験線でのML500、MLU001、MLU002、MLU002N実験を経て、現在、JR中央線大月駅近くの山梨実験線でMLX01による実用化走行実験が行われています。

実験線(先行区間)は総延長：184km、トンネル区間：160km、明かり区間：24km、複線(中央区間)、最急勾配：4%、最小曲率半径：8,000mとなっており、5月末現在最高速度：581km/h、すれ違い最高相対速度：1,003km/h、延べ走行距離：369,813km、一日最高走行距離：2,876km、延べ試乗者数：72,581人となっています。(JR東海)

車両は3両編成、4両編成の7両あり、5両編成実験も完了しています。電力変換変電所では車両の駆動電力を交換し、南線、北線用にインバータ設備が2セットあります。ガイドウェイはU字型で側壁に推進コイルと浮上案内コイルが、走行路面にき電ケーブル、電力・情報ケーブル、交差誘導線が設置され、乗降場と検修庫にトラーサ式分岐装置があります。乗降場はホームを屋内化したホールホーム構造で磁気シールドを兼ねた乗降装置を通して試乗者は車内に入り超電導リニアでしか実現できない時速500キロを体験します。

3. 超電導リニアの基本技術

基本技術は①超電導磁石、②地上コイル、③電力変換装置、④車上電源です。車両を推進するリニアシンクロナスモータは①、②、③でシステム構成され、車体を支持案内するのは①、②による誘導反発浮上・案内システムです。冷凍装置用や車内サービス用電力を供給する④は、①と②を組み合わせた誘導集電システムを採用しています。

①の課題はクエンチ(急激に磁界が消滅する)現象ですが、ほぼ完全にクリアした状態ですので、今後は高温超電導による実用レベルの磁石開発が急がれます。高温超電導が実用化されますと飛躍的に冷凍効率向上するとともに、仮にクエンチが起こっても急激な磁場減少がないため、ガイドウェイに与える衝撃も緩和され設計基準の大幅改善余地が生じ、コストダウンに繋がります。

②は所謂ローテクですが、東京・大阪間複線で推進用と浮上案内用でざっと200万個、400万個程度が必要になるため、徹底したコストダウンを図る必要があります。筆者(ほか2名)が発明したPLG(P:推進、L:浮上、G:案内)コイルは浮上案内コイルに推進機能を付加したもので、数量半減によりコストは大幅に改善されます。反面、ヌルフラックス線(案内用左右コイル接続線)に高圧がかかるという問題

があり、山梨実験線(宮崎では性能確認済み)で検証がなされているところですが。

③は0~60数ヘルツのVVVF(可変電圧、可変周波数)インバータで20MWクラスの変換装置が山梨では開発設置されています。

松波京大名誉教授(昭37年卒)が長年研究され、国内外で質の高い業績を残されているSic(シリコンカーバイド)は、究極(シリコン)に対し、高温化：3倍、高耐圧化：10倍、低損失化1/100倍、高速化10倍：閃電電力技術研究所資料より)の電力変換素子とされています。早期の商業ベース開発が実現されれば、長大トンネルや地下電力変換所がコンパクトに建設できるだけでなく、一般産業への波及効果も絶大と思います。

④の誘導集電の課題は停車中には電力が得られないため、補完的に二次電池が必須となります。実験線では取りあえずガスタービン発電機も搭載しています。

現在、自動車用として開発されている燃料電池(発電装置)がリニアに搭載可能になりますと、システムが大幅に単純化されます。燃料の水素を高圧にする必要はありませんが、高温超電導が車上に搭載可能な実用段階になれば、コイル冷却後の水素を燃料に使用可能になるかも知れません。

4. おわりに

超電導リニア実用化のためには、更なるコストダウン開発はも

とより、世界最先端の新技术を導入することが急務であり、積極的に研究開発を進めることが大切と思います。これからのエネルギー活用産業は産官学連携リスクを共有して新商品を開発し、世界経済をリードしていくことではないかと思っています。

我々、電気関係研究者技術者は、絶えず最先端技術に目を向け、長年培われた夫々の知的財産を活用していくことが、(我田引水ですが)リニアを戦略的に実用化させる早道と考えています。

Keep Surfing

(平15年度東京支部長) 岡崎 幸治 (平8年卒)

朝5時に目覚まし時計をセットして目覚めて出かけ、9時くらいに妻の目を気にしながら帰宅するというのが、最近の私の週末の行動パターンです。その間に海へ行ってサーフィンをしています。

サーフィンを始めたのは2年前の6月で、サザンオールスターズの「波乗りジョニー」がヒットしていたころです。一旦サーフボードを購入してサーフィンを始めると、毎朝4時半起きで海に行き、帰ってから出社するという生活をするようになり、すっかりサーフィンにハマってしまいました。

そのころ宮崎で勤務していたのですが、宮崎は年中通してサーフィンができて波が良い、九州で一番サーフィンに適している土地で

す。自分がよく行っていた木崎浜は、巨人がキャンプを行うサンマリスタジアムのすぐ裏にある浜で、九州以外に関西や中国地方などからもたくさんサーファーが訪れる全国的に有名なスポットです。そこでサーフィンに親しめたのは約1年でしたが、サーフィンに関するいろんな思い出が、今では故郷が宮崎ではないにもかかわらず、宮崎が日本の中で一番好きな土地になってしまっています。

私を感じるサーフィンの魅力は、全身で自然の素晴らしさ、美しさ、怖さを感じることができるとだと思えます。宮崎では主に夜明け前から海に行っていたのですが、朝1番に海に入ってボードにまたがって浮かんでいる時に朝日が水平線から昇るのを見ると、感動して仕事のストレスもすっかり忘れてしまったものです。また、波が高い場合はとどころ浜から沖への流れが生じていることが多いのですが、その流れに乗ってしまうといくら岸へもどろうと腕で漕いでも全く進まず、浜に戻れないのではないかと怖い思いをしたりすることもあるようです。そういう時などは自然の力の凄さ、人間の非力さを感じます。

今は福岡市在住なのですが、福岡市内から車で30分ほどの距離にある糸島半島にサーフィンができるポイントがあるため、週末に早朝に海へ行っていきます。福岡は日本海へ面しているた

め、冬がメインシーズンで、西高東低の気圧配置になった時の北風によって波が上がりやす。そのため、春になってしまおうとかなかなかよい波は立たないなど宮崎ほどサーファーにとって恵まれた土地ではないようです。しかし、住んでいるところから近いところにサーフポイントがあるというのはやはり非常に恵まれていると感じています。

本来はゴルフもできるようなにならないといけないのですが、まだまだサーフィンからは離れることはできそうにありません。将来的にはまた他の県に転動になったり子供が生まれたりして、サーフィンをするのが困難な環境になっていくことも考えられますが、もちろん仕事を一生懸命やりつつ、また家族の目を気にしながら家族孝行も一生懸命しつつ続けていきたいと思っています。

自転車と北海道と私

(石川 元也 (平9年卒))

毎年、夏になると北海道には旅行者がたくさん来る。その中でもバイクを移動手段とした旅行者はライダーと呼ばれ、自転車を移動手段とした旅行者はチャリダーと呼ばれ、徒歩を移動手段とした旅行者はトホダーと呼ばれている。

学生時代、私は某非公認サークルに所属し、チャリダーとなって北海道各地を回り、合計4回訪れた。ほとんどの場所に行き、行って

ない主要都市は空欄ぐらいてある。自転車での移動距離は団体行動の場合、一日で40km〜70km程度で、一人の場合は100km程度である。ゆつくりと動いていく景色を楽しみながら移動をし、観光をした。よく、「自転車でしんどくない？」と聞かれたが、風景の連続性と開放感では味わえないものだと思った。それでも、雨の日はやっぱりしんどく、個人行動のときには、全く移動しない日もあった。

敦賀まで走って、そこからフェリーに乗り、小樽に上陸するのが毎年のパターンであった。毎回、小樽から自転車をばらして電車に乗せ、目的地周辺まで移動していた。最初に電車から降り立ったのは遠軽であった。道路の広さや町並みの寂れ方は本州にはないものだと思った。サロマ湖畔のキャンプ場でテントを張って泊まった。翌朝、朝食を狐に奪われている人がいた。都会でなくても盗人がいることを学んだ。移動途中に山があれば登山もした。最も感動したのは利尻富士であり、高山植物が斜面にびっしり花を咲かせる様と宗谷岬、サロベツ原野が見渡せる景色は言葉では言い表せない美しさであった。

夏が終わって試験期間に入っても勉強に身が入らないのは言うまでもなく、次回はどこに行こうかとばかり考えていた。もともと東京が嫌いで東大を受験せず、京大に入学したのだが、

さらに田舎はないか、ずっと東京に住むことがない就職先はないか、という思いが頭の片隅にあった。ピンと来たのが今の会社だった。

入社してまず道東の中標津というところに配属された。札幌から車で7時間もかかるところで、京都からだったら、東京まで行ってしまうような距離である。学生時代に自転車で行っていた場所であり、空港もあって意外と都会であることを知っていたので、さほど落胆はしなかった。しかし、最初は冬の生活がどんなものか想像できず、寮が寒くて凍えるのではないかと心配した。与えられた部屋は畜熱暖房器が備え付けられた狭い部屋であり、非常に暑かった。全く寒さの心配がいらなかった。そこで2年間過ごした。また、学生るときに回れなかった裏摩周には自転車で行き、羅臼岳登山もでき、幸運だった。

その後、音更(おとふけ)という帯広のすぐそばにある事務所へ転勤となり、同時に学生時代から付き合っていた女性(姫路の近くの人)と結婚した。広くて古い住宅があったり、このときは寒かった。妻と二人で寄り添って寝た。畜熱暖房器はなく、煙突式の石油ストーブを買った。初めて夜でもストーブを消さないで寝た。妻との共通の趣味は温泉めぐりで音更はまさにたくさん温泉があり、非常によい場所であった。中でもお気に入りは土幌温泉で、泉質・香

りとも抜群に素晴らしいお湯であった。週末ごとに温泉に行っていた。

その後、旭川へ転勤となり、音更よりも都会に住むこととなった。北海道第2の都市とはいえないので、大きい市である。中心部から30分も車でいけば郊外に出られる。北海道の地図で見ると層雲峡が近くに思えるが、意外と遠く、車で1時間程度かかってしまう。もう一度温泉三昧するつもりであったが、なかなかそうはいかなかった。よく行ったのは深川の温泉である。あまり温泉らしいお湯ではないが、体が温まるいいお湯であった。

旭川であつた社宅は鉄筋で暖かかったが、狭かった。それまで使っていたダイニングテーブルとこたつは物置の中に安置された。1年で札幌に転勤となり、ダイニングテーブルだけは日の目を見ることができた。転勤3回目で見慣れているとはいえず、出産と転勤が重なったのは大変だった。

妻は雪国で暮らしたことがなく、積雪を心配していたが、一冬越えれば車の運転も、除雪もなれたものである。むしろ雪と戯れることを楽しみとしてくれて、つれてきた甲斐があつたと思う。

学生時代に乗っていた自転車に今でも乗ることがある。現在の社宅から事務所までは15kmほど離れているが、先日ためしに自転車で行ってみた。片道50分もかかり、いい運動になることは間違いない

が、さすがに都会で乗ると排気ガスと信号の多さが気になってしまふ。それから電車を一駅前で降りて歩くこととした。すっかり学生のころより体力が衰えてしまつたが、運動を継続し、体力を維持していきたいものである。現在のところ乗る機会は少ないが、子どもと一緒に自転車に乗られる時が来るのが楽しみである。

今年、北海道支部には私以来の会員がやってきた。彼もまた、北海道の魅力にひかれこの地にやってきましたという。建物が冬の寒さに対応したものがほとんどであり、冬の寒さはたいして気にならないので、水と空気と食べ物がおいしく、梅雨がない北海道に住むことを会員のみなさまにお勧めしたい。

同窓会だより

昭和10年卒クラス会報告

昭和10年卒業の私たちは、5月25日と26日の両日、薫風さわやかな新緑の神戸でクラス会を開くことができました。参加者は、総員6名という寂しい会となりましたが、それでもクラスの出席率は50%で、卒寿を過ぎた者の集いとしてはまずまずの出席ではないかと思っております。

初日の25日は、市内観光は思いとどまり、ポートアイランドのホテルに直接集合、先ずは、お互いの健康と一年ぶりの再会を喜び合

いました。ホテルの部屋からは、六甲山から神戸空港までが遠望でき、見事に復興した神戸市街の姿を目の当たりにして、阪神淡路大震災当時の苦難の思いをあらたにしました。

夕刻からの懇親会では、先ずもつて、これまでに亡くなられた恩師の方々41名の学友のご冥福をお祈りした後、集いに参加できなかった黒田、中堀、中沼、林氏の近況報告をおこない、一日も早い体調の回復をお祈りしました。

その後、盃を重ねるにつれて、何回ともなく口にした若かりし京都時代の思い出話をくりかえし、孫をとばして曾孫の話、自分の老化的話などが入れかわり、会の雰囲気には、やはり昔の学生時代の心のかよった友情がにじみでてきて、楽しさに時の経つのを忘れる思いでした。



翌26日は、ポートタワーのスカイラウンジから神戸の町なみを展望した後、遊覧船ルミナス神戸2で明石海峡大橋を楽しみました。危ぶまれた天候も、当日は絶好の五月晴れに恵まれ、船首のレストランの窓際座席からの眺めはずばらしかった。ことに海上から眺めた明石海峡大橋の雄大な構造美は、実に圧巻だったと大好評でした。

中突堤へ帰港後、私たちは、「来年は卒業70周年だから、お互いに頑張つて、京都で昭10会を開こう」と励まし合いながら、別れを惜しみながら旅客ターミナルで解散しました。

出席者名(敬称略)

小寺夫妻、清水、高田夫妻、神谷

神谷 進(昭10年卒) 記

卒業50周年同窓会

昭和29年卒業生の会は、憎まれ子世にはばかることに因んで、29稀会と称している。卒業以来、節目節目にすでに10回の同窓会をもち、親睦を深めてきた。そして今年5月12日には卒業50周年クラス会を嵐山で開催した。

関西に住む有志が1年ほど前から相談し、半年前には第一回の通知を出した。そのせいか出席者は42名(ほかに夫人6名)を数えた。これは物故者をのぞく卒業生の

71%に当たる。

当日はその前日の雨もあがり、晴天に恵まれた。午後1時、京都駅に集合し、久しぶりの会合を喜びながら貸し切りバスで京大桂キャンパスへ。我々は宇治キャンパスで学んだ最初の学年であり、時代の差とはいえ当時と比較して、新桂キャンパスの教育研究施設の充実ぶりには目を見張った。クラスタAの総合研究棟、桂インテックセンターを見学させてもらう。高台にあるため京都市内が一望でき、緑に包まれたすばらしい環境であり、21世紀におけるエクセレントユニバーシティという名にふさわしいキャンパスであるという印象を受けた。桂キャンパスを辞してから大覚寺を見学し、秘宝を見せてもらう。5時渡月亭ア



ネットス松風閣に集合。写真撮影のあと、午後6時から宴会を始める。恒例により出席簿の順番で井上博文君が最初の挨拶をして宴会は始まった。思いつき話や近況などを肴に酒を酌み交わし、旧交を暖めた。集まった同窓生は76歳から72歳のスパンがあり、ほとんどは定年退職し、いまは年金生活者である。一様に日本の高度成長を支えてきたという自信と誇りがあり、血色もよく若々しい。しばしの歓談の時間はあつという間に経ち、最後には倉野昌夫君の音頭で琵琶湖周航の歌を歌い、名残を惜しんで解散した。

今後我々の年齢などから、全国規模の同窓会は今回で最後とし、あとは有志で適宜行いたいと考えていることを付記する。

(発起人 井上和、片井、岸本、桑畑、塩見、染山、野田、平井、藤田実、山下)

平井 一正 (昭29年卒) 記

平井 一正 (昭29年卒) 記

業報告と収支決算書(表(1)ご参照)は全会一致で承認された。収入は学部会費が約150万円(500名分)減少した。これにより納付率も38.6%にまで低下した。

一方支出は名簿印刷・発送費および会報印刷・発送費が会費未納者が増加したため、印刷・発送数量の減少により約150万円減額となった。続いて平成16年度の事業計画案

本部だより

本部総会報告

平成16年度本部総会は5月29日

(土)、京阪ホテル(京橋)で関西支部総会に引き続いて開催、51名の会員が出席された。

近藤会長の挨拶の後、議案の説明と審議が行われ、平成15年度事

表(2) 平成16年度収支予算 (平成16年4月1日~平成17年3月31日)

科 目	予算額	平成15年度決算	備考
会費(学部)	8,040,000	8,056,000	2,680名分 (@3,000円/人)
(講習所)	105,000	105,000	35名分()
預金利子	10	44	
広告掲載料	140,000	140,000	会報新年号14社 (@10,000円)
広告(支部負担)	0	2,094,930	
雑収入	0	5,000	
収入小計	8,285,010	10,400,974	
前年度繰越金	9,992,376	12,056,198	
合計	18,277,386	22,457,172	

表(1) 平成15年度収支決算報告書 (平成15年4月1日~平成16年3月31日)

科 目	予算額	決算額	備考
会費(学部)	9,560,000	8,056,000	@3,000×2,685名
(講習所)	120,000	105,000	@3,000×35名
預金利子	360	44	
広告掲載料	140,000	140,000	会報新年号掲載分(14社)
支部負担金	1,497,000	2,094,930	
雑収入	0	5,000	
収入小計	11,317,360	10,400,974	
前年度繰越金	12,056,198	12,056,198	
合計	23,373,558	22,457,172	

2. 支出の部 (単位 円)

科 目	予算額	平成15年度決算	備考
名簿編集費	0	0	
電算機処理費	0	575,606	
印刷費	0	3,885,000	
発送費	0	583,909	
会報編集費	0	0	
印刷費	575,000	434,250	4月:5,500部
(記念号)	0	296,550	7,10月、新年号:3,100部
発送費	1,435,000	1,124,332	
(記念号)	0	793,417	
備品費	0	0	
通信費	160,000	169,870	電話・郵便・ADSL加入料
会員原簿管理費	500,000	554,415	電算機処理費
会費	400,000	350,966	役員会費(含む旅費)
総会費	300,000	300,000	
集金費	200,000	167,925	振込手数料等
消耗費	450,000	469,076	振込用紙、封筒等
旅費	300,000	341,040	支部総会出席旅費等
懇話会補助費	250,000	250,000	
支部交付金	0	900,000	※日15年度に2年分交付済
事務人件費	1,200,000	1,200,000	応研謝礼
雑費	0	68,440	
予備費	0	0	
支出小計	5,770,000	12,464,796	
次年度繰越金	12,507,386	9,992,376	
合計	18,277,386	22,457,172	

2. 支出の部 (単位 円)

科 目	予算額	決算額	備考
名簿編集費	0	0	
電算機処理費	900,000	575,606	会員異動
印刷費	4,200,000	3,885,000	4,000部→3,700部
発送費	850,000	583,909	郵便→メール便に変更
会報編集費	0	0	
印刷費	500,000	434,250	7月5,500部10月、新年号3,050部
〃(記念号)	300,000	296,550	4月5,500部
発送費	1,575,000	1,124,332	7月5,500部10月、新年号3,050部
〃(記念号)	900,000	793,417	4月5,500部
備品費	0	0	
通信費	160,000	169,870	郵便、電話、ADSL加入料ほか
会員原簿管理費	500,000	554,415	電算機処理費(異動、会費ほか)
会費	400,000	350,966	役員会(交通費含む)
総会費	300,000	300,000	
集金費	200,000	167,925	振込手数料等
消耗費	450,000	469,076	振込用紙、封筒等
旅費	300,000	341,040	支部総会出席旅費等
懇話会補助費	250,000	250,000	懇話会補助
支部交付金	900,000	900,000	9支部(日15.162年分)[10万円/支部]
事務人件費	1,200,000	1,200,000	応研謝礼[10万円/月]
雑費	10,000	68,440	お祝い品、香典
予備費	0	0	
支出小計	13,895,000	12,464,796	
次年度繰越金	9,478,558	9,992,376	
合計	23,373,558	22,457,172	

平成16年4月23日、(財)応用科学研究所において、領収書、帳簿等関係書類を慎重に監査し、支出及び決算が適正であると認めました。

幹事 橋 邦英

と収支予算案(表(2)ご参照)の審議に入り、事務局説明の後全員が承認した。

なお平成16年度の予算には、現在関西支部主導で検討中の「洛友会改革」(会費徴収方法の見直し・洛友会活動の活性化)の推進費用は含んでいないので、具体的に着手する段階で別途予算を追加すること

を併せて承認された。

次に役員変更に関し、教室代表の奥村浩士副会長の停年退官にともない、後任に荒木光彦教授が選任された。

また洛友会会則の一部改定案も可決された。(内容は次号掲載)

最後に木村磐根幹事より、電気百年記念事業の決算報告(別掲決算書をご参照)と島崎眞昭教授よ

り「教室の近況」についての報告の後総会は終了し、懇親会会場へ移動となった。

事務局 記

支部だより

九州支部総会報告

平成16年5月14日(金)、福岡市博多駅前のホテルステーションプラザにて、平成16年度九州支部総会を開催しました。本部から近藤文治会長、教室から橋邦英先生をお迎えし、九州支部からは主に福岡在住の会員20名が出席しました。

総会に先立ち、当支部恒例のカクテルパーティーを今年も催しました。このパーティーは、総会開始30分前から三々五々集まった出席者が、グラスを片手に歓談するというもので、今年も大盛況でした。

しかしながら、大変悲しいお知らせもありました。昨年まで総会や昼食会に毎回ご出席いただいていた安田大先輩(昭12年卒)が、4月27日、93歳でお亡くなりになりました。先輩は支部設立当時から今日に至るまで、当支部の発展にご尽力いただき、総会や昼食会では常に話題の中心にいらっしやっただけに、非常に残念でなりません。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

総会は岡支部長の挨拶で始まり、支部設立50周年を迎えた昨年



度の行事が予定通りであったことや、安田大先輩に関する思い出、今年度の抱負などについて述べられました。

引き続き、近藤会長からご挨拶をいただき、昭和27年の本部設立時から現在までの洛友会に関する思い出や、年々悪化している会費納入状況と今後の対応策などについてお話を伺いました。

橘先生からは、ご自身のご紹介とともに、独立行政法人化後の運営体制や、桂キャンパスの状況などについて、スライドでわかりやすく説明していただきました。

また、徳永幹事から平成15年度活動実績・会計の報告及び平成16年度活動計画案の説明を行い、満場一致で承認されました。

懇親会は、上田先輩(昭27年卒)の乾杯の音頭で始まり、参加者全

員酒を酌み交わしながら、終始和やかな雰囲気、昔話や近況報告などに花を咲かせました。

上田先輩は、ご同期の方々との同窓会の幹事として、この日の夕方まで山口にいらっしゃったとすることで、先輩の行動力に感服させられました。また、京大出身で三段跳びの五輪金メダリストである田島直人は、山口県出身だったなど、京大と山口の関係について、面白い話題を提供していただきました。

楽しいひとときもあつという間に過ぎ、若年層の堀さん(平5年卒)の乾杯で懇親会を締めくくり、最後に全員で記念撮影をしてお開きとなりました。

川内野 寿博(平4年卒) 記

中国支部総会報告

平成16年5月26日(水)広島全日空ホテルにおいて第51回目となる平成16年度洛友会中国支部総会が開催されました。総会には本部から近藤会長、教室から引原先生をお迎えし、中国地方各地から32名の会員の参加を得て盛大に開催されました。

総会は、開会にあたり、洛友会中国支部の初代支部長を務められた故真田先輩のご冥福をお祈りし黙祷をささげた後、池内支部長よりご挨拶をいただきました。引き続き支部事務局から支部会員異動状況、支部活動状況を報告、会

計決算、予算案について説明を行い、出席者全員の了承を得て各案が承認されました。

続いて近藤会長から洛友会本部の近況について、また、引原先生から大学の近況について、それぞれお話しいただき、予定どおり全ての議事を終了しました。

写場での記念撮影の後、全日空ホテル最上階にて、門野内先輩のご発声により支部恒例の懇親会を開始しました。ホテル最上階から広島島の夜景を眺めながら、支部会員の思い出話、近況報告等々、終始和やかな談笑の中で大いに懇親を深めながら会は進み、最後は、近藤会長の広島島の銘酒の話とご発声で支部懇親会を閉会しました。

藤山 徹(平9年卒) 記



関西支部総会報告

平成16年度の関西支部総会は、平成16年5月29日(土)にホテル京阪京橋にて51名の参加者を得て開催しました。また、総会に先立ち、「電力自由化の現状について」と題して講演会を開催しました。

講演会では、関西電力(株)の三浦良隆氏(昭55年卒)が、電力自由化の現状に関して、電気事業をめぐる規制緩和の背景と電力自由化制度議論の動向を中心に、トピックスとして平成15年8月の米国・カナダ大停電について最新の情報を講演頂きました。

総会では、細田支部長からの挨拶の後、議事として平成15年度事業報告ならびに決算報告、平成16年事業計画ならびに予算編成、平成16年度関西支部役員改選について審議され満場一致で承認されました。平成16年度の新役員は、

支部長 三木弼一(昭37年卒)
副支部長 森本浩志(昭40年卒)

ゴルフ競技会報告

第81回関西支部ゴルフ競技会が平成16年5月23日(日)武庫ノ台ゴルフコースにて開催されました。

当日は、晴天に恵まれ、インは木村さん(S30年卒)、アウトは三崎さん(S40年卒)の始球式でプレイを開始し、合計20名(うちシニアの部9名)が競技に汗を流しました。

結果は次の通りです。

総務幹事 野口正弘(昭45年卒)
会計幹事 法田雅彦(昭52年卒)

の各氏です。なお、今年の関西支部の家族見学会は10月30日(土)に「明治村と日本ライン下り」を計画しております。関西支部会員の方は、奮ってご参加頂きたいと思えます。

支部総会終了後は、引き続き本部総会・懇親会が開催されました。懇親会では、近藤会長をはじめとした先生方や久しぶりに再会した会員の方々と酒を酌み交わしながらの歓談をすすめるうち、予定の1時間30分はあつと言う間に過ぎてゆきました。最後は関西支部で恒例となっている「洛友会の歌」を全員で斉唱し、来年の再会を誓っての散会となりました。なお、支部総会の模様は関西支部ホームページでも紹介しております。(洛友会関西支部ホームページ <http://www.kjswbne.jp/rakuyuu/>)

富岡 洋光(平2年卒) 記

(シニアの部)

- 優勝 山口 淳 (S34年卒)
- 2位 森田 宏 (S34年卒)
- 3位 木村 磐根 (S30年卒)

(一般の部)

- 優勝 中村 勤 (S46年卒)
- 2位 松尾 茂 (S38年卒)
- 3位 山本 博士 (S49年卒)

〈第82回競技会のご案内〉

平成16年10月16日(土)
於 武庫ノ台ゴルフコース

多数のご参加をお待ちしております。

〈連絡先〉

関西電力

八木 誠 (S47年卒)

山川 豊 (H10年卒)

06・6446・9762

北陸支部総会報告

平成16年6月5日(土) 富山市
「いきいき亭」において、平成16年度北陸支部総会を開催いたしました。梅雨入り直前の暑い一日でしたが、本部から近藤文治会長、教室から大澤靖治先生をお迎えし、合計20名が出席して行いました。

今年には北陸支部設立50周年にあたりますが、中嶋支部長から支部設立当時の状況や50周年の記念を兼ねて前支部長の西村顧問の講演がある旨の挨拶がありました。

引き続き近藤会長のご挨拶がありました。昭和27年の洛友会創立以来何らかの形でずっと本会の運営に携わっていること、30周年

時には田丸先生のお力を借りて洛友会名簿のコンピュータ化をしたこと、さらに現在は改革の時代であり、洛友会においても会費の徴収や名簿作成について、その方法の見直しを検討中とのことでした。

次に西村顧問から「北陸支部の50年」と題してご講演がありました。支部設立当初は電力多消費産業に就いておられる会員が多数を占めていたことやその後の産業界の技術革新、IEEEの20世紀の四大論文についてなど幅広い内容のご講演でした。

次に支部幹事のほうから支部近況報告、会計報告に関する議案が報告され、原案どおり承認されました。

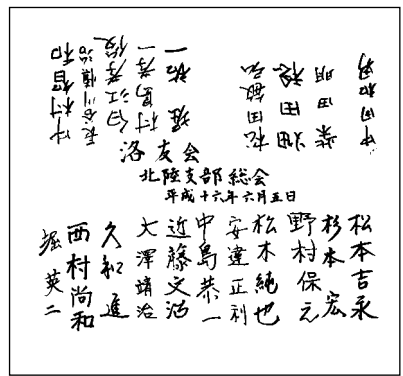
最後に大澤先生がパソコンとプロジェクトを先生自らご用意され、電気系教室の近況についてご



東京支部総会・懇親会の報告

平成16年6月12日(日)に目黒の八芳園にて東京支部の支部総会を開催しました。総勢56名による会合となりました。

支部総会は午後2時に藤江支部長による挨拶で始まり、沢田総務幹事から平成15年度の行事、予



説明されました。桂キャンパスについてはさまざまな写真を使用され、桂キャンパスに足を踏み入れたことのない「吉田キャンパス世代」にとってもその状況をよく理解することができるもので、出席者全員が先生の説明に聞き入っていました。

総会終了後の懇親会は、北陸の幸を肴に、先生方や先輩・後輩、友人と酒を酌み交わして、楽しい一時を過ごしました。最後に逍遙の歌を合唱し、万歳で散会となりました。

中田 和男 (昭63年卒) 記

算・決算などの説明、関監事から会計監査結果の報告がありました。決算内容は拍手をもって承認されました。

次に、沢田総務幹事から、若年層の掘り起こしなどの特命事項を担う庶務幹事の新設などの支部会則修正案の説明があり、若干の修正を施して、拍手をもって承認されました。引き続き次期役員候補の紹介が行われ承認されました。

平成16年度の新役員は支部長馬場征彦、副支部長 古濱洋治、総務幹事 田村俊之、会計幹事 川上弥、庶務幹事 富岡耕治、監事 関清三の6名です。藤江支部長は退任に際して、法人化への対応や若手会員との交流といった課題への対応に心残りがあること、また東京支部活動への会員各位のご支援に感謝を述べられました。

その後、役員交代し、馬場新支部長より、会費納入率の向上および若年層の掘り起こしを積極的に検討するとともに、景気の低迷、大学の独立法人化および若年層の就職状況の変化(推薦↓自由公募中心)などという環境下において、収入構造の改善や同窓会のありかた、若年層との意見交換を重ねることにより、同窓会の直面している危機的状況を打破していく支部を目指したい、との挨拶がありました。

引き続き田村新総務幹事より、平成16年度の行事、予算計画が説明され承認されました。その

後平成15年度に米寿・喜寿を迎えられた方々(米寿4名、喜寿11名)のお祝いを行い、出席されていた米寿の永安様(昭16年卒)に代表として、お祝いの目録が手渡されました。

同日、同会場午後3時30分より、京都大学名誉教授 池上文夫氏(昭22年卒)、東京大学大学院教授 仁田旦三氏(昭42年卒)、京都大学大学院教授 松重和美氏の3名の講師の方をお招きし、「京都大学独立法人化に伴う産学官と洛友会のあり方」という演題で講演会を開催しました。開会に際し、藤江前支部長より、講師の略歴の紹介、本講演会参加への感謝が述べられました。松重氏からは、独立法人化に伴う教職員職場環境変化(「教官」から「教員」へ)、京都大学の産学協同の取り組みのご紹介、仁田氏からは、ご在職中の東京大学の同窓会と洛友会のシステムや制度の違いや他大学の同窓会の状況についてのご紹介、池上氏からは、洛友会本部の収支状況についてのご紹介があった後、パネルディスカッションに入り、会場も交えた活発かつ有意義な意見・情報交換が行われました。洛友会の本来の目的の議論の中で、近藤会長(昭18年卒)からは、過去の洛友会の歴史についてのご紹介などがありました。

午後6時前より恒例の懇親会に移りました。古濱新副支部長の挨拶

擗の後、池上副会長の乾杯ご発声
で始まり、料理を囲んで会員の
方々の談笑が広がるなか、米寿、
喜寿を迎えられた方々を代表して
米寿の安永様に記念のスピーチを
頂きました。富岡新庶務幹事（昭
61年卒）による若手のスピーチに
つづき、恒例の琵琶湖周航の歌の
合唱があり、最後は馬場新支部長
の中締めにより午後7時頃に散会
いたしました。

川上 弥（昭61年卒）記

北海道支部総会報告

去る6月12日（土）札幌市内の
「鮭栄」にて、平成16年度北海道
支部総会を開催しました。当日は
最近北海道で盛り上がりつつある
「YOSAKOIソーラン祭り」の真っ
最中であり、街が賑やかな中での
開催となりました。

まず、芝山支部長からの挨拶
ならびに乾杯のあと、幹事より
会計報告ならび支部会員の状況
の説明を行い、満場一致で承認
されました。

今回は7名と北海道支部の中で
も少人数での開催となりましたが、
5年ぶりの新入会員となる佐野さ
んに出席していただき、自己紹介
などの後、最近の京大および電気
系教室の近況、特に桂キャンパス
の様子について、他の出席者から
の質問への答えも交えて話してい
ただきました。その後全員の近況
報告となりましたが、年齢差50歳



を超える中でも、それぞれ京都を
思い出しながら会話を花を咲かせ、
時間を忘れて懇親を深めるうちに、
予定の2時間をかなりオーバーし
てのお開きとなりました。

なお、その後有志にてススキノ
に繰り出し、さらに親交を深め
「琵琶湖周航の歌」を合唱した後、
散会となりました。

木元 伸一（平元年卒）記

四国支部総会報告

6月18日（金）、高松市内の
「全日空ホテルクレメント高松」
において、第49回洛友会四国支部
総会が開催されました。

本部から近藤文治会長、教室か
ら石川順三教授の御出席をいただ
き、四国内からは32名の会員が集
まりました。

総会は、今年春の叙勲で栄えあ
る旭日大綬章を受章された近藤四

国支部長（昭28年卒）の挨拶で始
まりました。地方分権が進み、大
学が独立行政法人化されるなど変
革の時代だが、こうした時代こそ
大学の役割は重要で、京都大学の、
また洛友会の力で先行き不透明な
時代を乗り切らねばならないと
お話しがありました。

次に近藤会長から御挨拶をいた
だき、構造改革が叫ばれている昨
今、京都大学では独立行政法人化
や桂キャンパスへの大学院の移転
が進み、洛友会でもかつてない改
革の時期を迎えている、と力強く
お話しになりました。

石川教授からは、桂キャンパス
への大学院移転について、設備・
風景を撮影した写真などをプロジ
ェクターで分かりやすく説明して
いただきました。また、大学の独
立行政法人化に伴う研究者として
の環境変化についてもお話しをい
ただきました。

続いて、会計・会務報告に移り、
10年間の長きにわたり支部活動に



ご尽力いただいた近藤支部長と井
上副支部長が御退任され、武智支
部長・四宮副支部長の新体制がス
タートしました。

その後、船越先輩（昭22年卒）
の乾杯音頭に始まり、先生方や友
人と酒を酌み交わしながら懇親会
となりましたが、話題の中心はな
んと言つても、近藤前支部長に持
つてきていただいた旭日大綬章の
勲章と勲記でした。お持ちいただ
き大変有難いところであるうえ、
思いがけず親授式の様子について
もお話しをいただけるなど、非常
に楽しい会となりました。あつと
いう間に予定の時間となり、最後
には、恒例となりました「逍遙歌」
と「琵琶湖周航の歌」の合唱で懇
親会を締めくくりました。

その後、有志一同は同ホテル21
階のバーにて、高松の夜景を眺め
ながら深夜まで親交を深めまし
た。

翌日、石川先生は四国支部メン
バー有志と一緒に志度CCにてゴ
ルフを楽しみました。

段上 玲浩（平8年卒）記

編集後記

今年の梅雨は陽性型で、今まで
のところ台風の接近による雨のみ
で、雨量も少なく列島各地で連日
猛暑となっています。

訃報

夏祭りシーズンを迎え、関西で
は京都・祇園祭、大阪・天神祭が
間近です。
8月には例年の夏の高校野球が
始まり、甲子園球児の激闘に加え、
今年はギリシャ・アテネオリンピック
が開催され、日本人選手の各
種目の活躍如何ではメダル獲得の
期待がかかっており、過去に例の
ない暑い夏休みになると思われる。
松本 博 記

講昭4	山田 恒次	16	・	3	・	25
昭7	西岡 敬二	15	・	12	・	20
昭7	日野 宗雄	16	・	4	・	19
昭8	平野 晃	15	・	4	・	26
講昭9	甫木元 春繁	16	・	5	・	19
昭10	和田 壽太郎	16	・	4	・	3
昭12	安田 振之助	16	・	4	・	27
講昭14	鳥屋尾 昌三	16	・	4	・	7
講昭15	柴田 章	15				
昭16	山本 福雄	16	・	1	・	17
昭17	奈波 美文	16	・	1	・	21
昭18	伊原 松太郎	16	・	5	・	19
昭22	小島 隆	16	・	3	・	5
昭22	村田 精二	16	・	4	・	10
昭22	岩本 市平	16	・	2	・	18
昭26	松尾 哲男	16	・	4	・	21
昭27	堀 謙二郎	16	・	5	・	16
昭29	浅田 正陽	16	・	3	・	27
昭37	大石 明良	15	・	6	・	26

以上の方々のご逝去なさいま
した。
謹んで哀悼の意を表します。